

〈翻 訳〉

イタリアの図書館利用案内 —調査、娯楽、研究のために—(4)第4章, 第5章

宍 道 勉

Tsutomu SHINJI : Guide for the Use of Libraries in Italy (4) —Chapter 4, 5—

既に述べている通り、このガイドの対象は専門家でなく、一般向けに図書館を紹介するものである。今回は、図書館で働いている人、図書館にはどんな資料があるかを紹介する。次に図書館の現在と未来について、コンピュータ化とネットワーク化の重要性を説く。本書(原書)の発刊から20年を経ているので内容は古いが、イタリアの図書館思想を紹介することにより、その存在意義を改めて考えさせてくれるものである。

キーワード：イタリア 図書館 利用案内

I はじめに

本書 (Maria Cecilia Cuturi: Guida all' uso delle biblioteche; ricerche svago studio; Come orientarsi nella lettura, Roma, Editori Riuniti, 1985) の翻訳も第4回となった。原書では、最終章に図書館の歴史を簡潔に表しているが、著者はイタリアの図書館史を改めて刊行する予定なので、今回で翻訳に由るイタリアの図書館案内を終える。

本稿は、コンピュータ化に向かう'80年代のイタリアの図書館がいかに苦悩していたか、その様子を伺い知ることが出来る。しかしこれは、イタリアに限らず他の国々の図書館も同様の道を辿った訳である。ただ、そこにはイタリア図書館の特徴が表れている。少なくとも日本の図書館とは異なった方向性を見せていることが分かった。これは正しく近代イタリア図書館史の一ページを示しているのである。

第1回＝本誌第52号, 2005

序論 (Premessa)

第1章 イタリアの図書館体制

(L' organizzazione bibliotecaria in Italia)

第1節 国立図書館 (Le biblioteche statale)

第2節 地方公共団体図書館

(Le biblioteche di enti locali)

第3節 その他の図書館 (Altre biblioteche)

第2回＝本誌第53号, 2006

第2章 検索と目録 (La ricerca e cataloghi)

第1節 図書館を選ぶ

(La scelta della biblioteca)

第2節 入館 (L' ingresso in biblioteca)

第3節 上手な目録の利用

(Il buon uso dei cataloghi)

第4節 著者目録 (Il catalogo per autore)

第5節 主題検索 (La ricerca per argomenti)

第3回＝本誌第55号, 2007

第6節 件名目録 (Il catalogo per soggetto)

第7節 分類目録

(Il catalogo per materia o sistematico)

第8節 その他の目録 (Altri cataloghi) (省略)

第3章 図書館サービス

(I servizi della biblioteca)

第1節 閲覧室 (La lettura in sede)

第2節 貸出 (Il prestito)

第4章 図書館内部 (Dentro la biblioteca)

第1節 図書館はどのように作られたか

(Come è fatta una biblioteca)

第4回 = 本稿

第4章 図書館内部 (Dentro la biblioteca)

第2節 図書館で働く人

(Chi lavora in biblioteca)

第3節 図書館には何があるか

(Che cosa c'è in biblioteca)

第5章 図書館の現在と未来

(La biblioteca fra presente e futuro)

第1節 組織の一部としての図書館

(La biblioteca come parte di un sistema)

第2節 国内図書館サービス

(Il servizio bibliotecario nazionale)

第3節 図書館業務の自動化

(L'automazione in biblioteca)

II 今回の本文

第4章 図書館内部 (Dentro la biblioteca)

第2節 図書館で働く人 (Chi lavora in biblioteca)

しばらく前にフィレンツェのある図書館が、高等学校の生徒に、図書館にはだれが働いているかという調査を行った。その結果、質問を受けた大多数は図書館には保存と、カウンターで本を手渡す役目に何人かの管理人がいるだけと思っていることが分かった。また殆どの生徒は図書の収集がどのように形成され配列されているかを問題にしてもいなかった。大抵は蔵書がそこに魔術で生まれたようにあると思っていた。

こうした無邪気な思い込みは、ある点では図書館がひとりで与えてくれるという、これまでに描か

れている図書館のイメージと符合する。よく図書館のことを良書をたくさん保管する所で、埃だらけになった職員が時間を過ごしながらかが本を請求するのを待っていると思い込んでいる。同様にその上、映画がこのイメージをさらに助長する役割を果たした。昔の映画のシーンで、図書館に居合わせたヒーローの探偵が必ず眼鏡をかけた物悲しげな女性司書と出会うのを思いおこすのであろう。

今やこのイメージの誤りを正すときである。つまり図書館事務室の活動は精力的なものであり（少なくともそうでなくてはならないこと）、必ずしもスタッフすべてが眼鏡をかけている訳でもないし、精彩がない訳ではない。とはいえ、図書館に対し国民の大概は敬意を払っているのである。

街の大図書館で一般利用者が出会うのはそこで働いている職員のほんの一部である。通常利用者が接触するのは入り口で受付をする管理人、資料を渡すスタッフ、読書室で行儀よく行動しているかを監視するスタッフだけである。せいぜい情報サービスの担当者とか、部署の責任者に話かけるぐらいである。しかしその他にも多くのスタッフが働いて、図書館の機能を万全にしようとしている。これについては後の章で説明したい。細かい点には立ち入らないが、図書館事務室では、どんな知識と専門的資格を持っている人が、どのような業務を行っているかについて知らせておきたい。

ひとたび本が図書館に到着すると、決まった行程を経て初めて利用者が自由に使えるようになる。この行程に沿って、その本は一連のきっちりと正確に定められた手順に従う。《図書館学》つまり図書館科学がこれら手順のそれぞれに名前をつけている。それを手短かに紹介する。

本は到着するとすぐ《受付を済ます》、つまり簡単な登録手続きを行い、番号をもらう（受入番号）。その番号はその本のあらかじめ決められたページに記される。次に《押印をする》つまりその本の何ページかに図書館印が押印される。

受付と押印が済むと、その本の配置を決める。つ

まりその本固有の位置が定まる。この位置がいわゆる書架番号（原文p. 58参照）の略号と決められている。その書架番号は一般的には2つの要素からなる。大抵の場合、初めの番号が書庫の正確な区域を、2番目がその区域の中でその本が占める特定の位置に対応している。例えば書架番号 [PER.IT.309] とはこの出版物がイタリアの雑誌区域 [PER.IT] の309番の位置にあることを表している。あるいは本が主題別に配列してある図書館では、初めの書架番号が分類番号に、2番目が著者の姓のイニシャルに相当する。書架番号を2枚のラベルに記載し、それを本の背と表紙の内側に糊で張り、さらにカードにも記載することによって目録の順序通りに配列されるのである。こうした作業が不可欠なのは、それによって他の本の中からその本を素早く探すことが出来るからである。

その本の目録作業が終わると、何名かの職員（目録担当者）が、定められた規則に従ってカードを整え、それぞれの目録に挿入する（第2章参照）。目録カードはタイピングされて、配列する担当者に手渡され、目録の正しい位置に挿入される。この作業にはそれなりの規則と工夫が求められる。その本はあらかじめ定められた位置に収まるからこそ、利用者が自由に使えることとなる。

こうした処理はすべてある程度スタッフの労働が必要となる。当然のことだがその作業は蔵書構成や、図書館に日々入って来る新刊出版物の冊数によって異なる。

他に欠かせないのが管理部門のスタッフで、図書館経費の予算を執行する会計面で、不可欠な人材である。

つまり図書館が雇用する人数は図書館の大きさと重要性に関係している。貸出し担当とか小規模の市立図書館に携わるには一人で十分である。図書館が大きくなればなるほど、スタッフの人数も増える。現在ローマとフィレンツェの国立中央図書館の職員は400人以上にのぼる。そこでは多くのスタッフが活動しており、それぞれ異なった決められ職務をこ

なしている。また様々な作業をこなすことが出来るよう資格と必要な学歴を備えている。

職員はその部署で、しっかりと決まった作業を実行しなければならない。しかし現実には図書館では必ずしもこのように固定した役割分担が決まっている訳ではない。うまく行かないこともある。労働の世界ではどこでもあるように、しなければならないことと、行う必要のあることの調整をはかることもある。

重要な部署では、司書（学士）や司書補（上級中学校卒業資格）が目録を作成し、カードを配列する仕事に就いている。既に述べた通り、目録担当者は単にカードに著者名、書名などを書き込むだけではなく、専門の図書館学知識が求められるのである。1冊の本の目録を作るということは、単に著者の氏名や書名などをカード一杯に書き込むことではなく、つまり専門の知識が求められることなのである。また目録を取る（主題化）場合に件名を選ぶこと、その本が分類目録ではどの分野に属するのかを判断する（分類）、のも同様である。このようにこうした作業には、多くの専門の知識と十分な教養が求められるのである。

目録カードを配列することは易しそうで機械的作業に見えるかもしれない。しかしここでも多くの規則に従わなければならない。おまけにきわめて責任のある仕事である。もしカードを間違った位置に挿入したり、間違って編集したとすれば、その本は読者を失ったものと見る方が良い。つまり利用者がそれを探すのに必要な《鍵》が存在しないからである。配架作業や市民への情報サービスは通常は司書補に任せる仕事ではない。

タイピストや門番（初級中学校卒業や小学校卒）には本の配架や管理の仕事以外の役割がある。彼らは本を受け入れ受け入れ番号を登録し、蔵書印を押すこと、書架番号のラベルを用意し、カードをタイブすること、および書庫で本を探すことである。

図書館界では以前から司書補について、その規定や役割について職員の間で活発な議論が戦わされて

いる。しかし職業教育の必要がある、という点で必ずしも意見が一致しない。しかもなお上級司書への選考に取り組むには必ず求められることがある。それはイタリア文化の十分な知識、現代外国語、初歩の法律および図書館学の基礎知識である。しかし図書館の仕事を果たすには専門的な知識が必要である、と強く主張している訳ではない。

さらに（イタリアには）司書の職業教育学校が少ない。ローマの「古文書資料員と司書の専門学校」とヴァチカンの学校の他にはボローニャ、ミラノ、ナポリ、パードヴァ、パロマの大学院専修課程の学校があり、いくつかの文学部や教育学部で図書館学を教えている。さらに近くではウディーネ大学で書籍学士コースが動き始めた。

従って司書に求められる知識とはどのようなものかといえば、とにかく何でもこなせることである。

「国」も「州」どちらも、既に図書館で働き、その一員となっている人々を養成し、新知識研修コースを計画準備している。しかしこうしたコースは、図書館界が必ずしも法的改訂までを考慮していないので、積極的に新しい課題に取り組むほどの広がりを見せていない。

今日ではゆっくりではあるが、図書館も圖書の保管所から文化や情報を伝播する総合施設へ変わろうとしている。つまり司書は能動的な役割を帯びているわけで、目録規則や本の主題把握の規則を知っているだけでは十分ではない。司書は十分な知識を持った上で、文化とそれをめぐる現実に取り組む心構えがなければならない。ということは自分が働く社会領域の伝統と、社会構成にも習熟していなければならないのである。ともかく現代の情報流通システムを考えた情報活動の研究もしなければならない。そういう意味で欠かせないのが情報工学、つまり情報科学の基本原則ぐらいは知っていなければならない。

第3節 図書館内にあるもの

（Che cosa c'è in biblioteca）

図書館には必ずや写本の原典、全てのジャンルと特徴を備えた図書、あらゆる時代の新聞や雑誌がある。近年、コミュニケーション分野の進歩は図書館にもAV資料をもたらしたが、量的に言えば一般資料の普及には及ばない。現在でも図書館の主役はやはり「図書」である。

凡その数字を上げると、約400万冊の出版物（1980年代当時）を所蔵するローマ国立中央図書館もあれば、ほぼ数千冊を所蔵するきわめて小規模の市町村図書館もある。この最低数千冊の図書では本来の図書館蔵書とはいえないかもしれない。

様々な異なった主題を持った図書があれば、すべてである一つだけの主題にしばった図書もある。これまで見て来た通り、中にはある特定の知識分野に特化した公共図書館がある。例えば、ローマ国立医学図書館は医学資料だけを収集しており、特定の分野の人々にサービスしなければならないので、他の分野の資料を提供する義務はない。

我々がよく知っている現代の印刷図書もあるが、同様にきわめて異質の図書もある。図書館はその多くが、特に何世紀前にも出来た図書館には紙とは材質も形状も全く違う資料に書かれた古典的写本がある。2千年以上も前のパピルスの巻物も、また高価な装飾を施した羊皮紙の中世法典も保存されている。写本のほかに「印刷初期本（インキュナブラ）」つまり14世紀末か15世紀初期の版がある。その当時は未だ新しい印刷技術は普及していないので、そうした本はきわめて珍しいものである。こうした貴重資料は《写本や稀観書》と呼ばれるもので、通常はすべて専門の部署で保管している。「初期印刷本」が導入されて以後のものでも、手書き資料はどんなものも《写本》とすることを明確に定めている。だから詩人、学者、画家の手紙とかメモも写本である。

（原書p. 116には改築前のローマ国立中央図書館の写本や稀観本の調査室の写真があり、ここが尤も頻繁に利用される部屋であり、開架書架で借りること

も他の部屋で閲覧も出来るとある。)

ここでは専門図書館や何千何百と言う程度の資料を所蔵する図書館は取り上げない。同様に県都の重要な図書館についても述べない。ただ法的にこうした図書館はその県で印刷されるあらゆる資料を保存しなければならないし、その地方の歴史や文化に関する資料提供をしなければならないことを記憶に留めておこう。

その一方で中小規模の公共読書図書館には何があるかを見よう。こうした図書館には概ね10,000から20,000冊の蔵書があり、イタリアにある大多数の図書館がこれに当たる。

公共読書専門図書館は、サービス対象である市民の興味関心を考えた蔵書を構成し増強しなければならない。つまり大多数の利用者の意をくんで、様々な主題を扱った図書を受け入れなければならない。例えば、村の経済面で、ほとんどの住民が農業を営む村の図書館であれば、教養図書を色々取り揃えるだけでなく、農業問題を扱う雑誌を購読する配慮が必要である。栽培技術に関する図書を購入することがあっていい。勿論その資金をすべてそれに使うのではなく、限度を決めておき、2、3の利用者にしか喜ばれないものであっても、値打ちがあれば特に高価な芸術作品を購入することがあってよい。上手く機能したいと願う公共読書図書館は、すべてを少し購入する。また市民の関心が高い情報分野については個々に注意を向ける。これは当然ながら絶えず財政的資金と図書館のスペースとのバランスをはかっていることである。

公共読書専門図書館が所蔵する資料の大部分は概して文学、つまり小説、短編、小話である。それらはいわゆるイタリアや海外の古典、つまり明らかに万人が教養形成に重要なものとして認める本から、ヒット小説、英語でいうよく売れるという意味の《ベストセラー》が絶えず求められている。

小規模図書館は、受け入れの際に必ずしも新刊情報が手に入る訳ではない。近くの本屋に本がない(ほんの僅か)場合、その図書館は出版社或は都会の大

きな書店に頼まなければならない。この場合も図書館が出版社や書店と顧客関係があり、それが継続してない場合には時間が掛かる。注文から書架への配架までには数ヶ月を要することがある。つまり図書が読者に届くときには既に流行遅れとなる。この不便さと他の理由もあって大図書館を煩わせることとなる。

文学書の他には必ず一定数の学生の学習用資料の百科事典、辞典、一般向け科学全集などがある。それは放課後、時には両親をも難儀をさせている学校の課題にもすべて役に立つものである。子どもたちにとって少しでもスペースがあれば、彼らにふさわしい楽しい出版物、例えばトボリーノ(ミッキーマウス)から冒険小説、娯楽本から易しい科学実験に関する本などもあっていい。

一般的には特殊な論文や主題の研究論文は多くはない。そのほとんどが間違いなく文学、哲学、歴史など人文科学関係の資料である。これはこれまで見て来た通り司書の素養が、主として人文科学に片寄るものであることを示している。日々出版される非常に多数の本の中から選択するのは難しい。だから通常はこれまで通り、良く知られている主題や、社会的に信頼のある著者を優先することとなる。だから分かりきったことだが中小の図書館には、新しい現代の問題を扱った魅力ある資料であっても、知られない著者の作品は置かれていない。

さらに大抵どの図書館にも定期刊行物、新聞、週刊誌などの専用スペースがある。それより小規模の図書館といえども全国に出回る資料だけでなく、利用者の要望によって地方の出版物を所蔵する所もある。また地域の文化活動、例えば展覧会、集会などの報告書や掲示を置く場合もある。恐らくは市、県、国の出版物もあるにちがいない。

時には小規模図書館でもヘッドホンで音楽を聴くことの出来るコーナーを持っていることがある。いずれにせよレコードやカセットがコレクションとして提供される図書館はほとんどはない。

また映画、マイクロフィルとカスライドの視聴覚

サービスをみるのはさらに難しい。つまりこのサービスは極めてコストのかかる装置の購入や、その利用に要するスタッフが必要があるというわけである。しかしながらこのサービスは日に日に重要で不可欠なものとなろうとしている。実際に図書館が情報を普及しなければならないとすれば、視聴覚サービスを無視できない。今日では印刷物が文化を伝える唯一の手段ではない、図書館に新しい情報伝達メディアが加わり、視聴覚資料にはその重要な役割がある。

ここまで図書館に置かれるべきものの列举に努めた。しかし忘れてならないのは図書館には、必ずや静かで快適で居心地の良い空間があり、そこでは勉強したり楽しく本を読む場であり、他にはない静寂がある。また予期しない友人との出会いの場ともなる。実際図書館は出会いの場とか展覧会や集合の場だけではない。読書室では、静寂が当たり前で会話もひそひそと行われる。つまり同じテーブルで別々に座っていても共通の課題や関心を認める仲間意識が生まれる。

第5章 図書館の現在と未来

(La biblioteca fra presente e futuro)

一組織の一部としての図書館、国内図書館サービス、図書館の自動化一

今日までイタリア国内における異種図書館間の付き合いは多くなかったし、本来そうあるべきなのに簡単ではなかった。つまり図書館はそれぞれ連絡を持たない島のような存在であった。自らの力だけを当てにしながら機能し、所蔵する資料だけを利用する。図書館同士の情報交換は、昔ながらのあまり機能的でない方法や手段で行われている。いつも利用する図書館で欲しい資料が見つからない利用者は、一部の例外を除けば、新しい図書館で手続きをすべてやり直すしかない。もちろんこうした状況が理想ではない。

第1節 組織の一部としての図書館

(La biblioteca come parte di un sistema)

図書館サービスを効果的に行うために絶対不可欠なのは、図書館同士が協力して行動することである。

一つの単位としての図書館は自分の能力だけを当てにしているので、量的にも質的にも未だきわめて限られたサービスしか提供できない。実際これまで見て来た通りこうしたサービスはさまざまな要因によって多様化している。例えば財政資金、外部世界の刺激をつかみ取る能力といったスタッフのタイプである。いずれにせよ、スタート段階がどうであれ、他の図書館と協力しない限り、一個の図書館では市民へのサービスを拡大することはできない。例えば数字だけを例に挙げても、それぞれが1,000冊を所蔵する2つの図書館は、一緒に機能することによって銘々が2,000冊の本を持った2つの図書館に変わると言える、しかし利用できる本が増加するだけでなく、協力の利点はさらに機能することである。

国内のどこも十分な図書館サービスを確実にするために、何年も前から多くの活動が行われている。図書館が独自の資料管理を取り止め、協力体制を発足させたのもそのひとつである。今やその考えは政治家にも受け入れられている。州法はその時期に違いはあっても、図書館組織新設に合意をしている。時には図書館組織への加入には州による財政支援が必要と判断したところがある。その良い例がウンブリア州である。

しかしここで述べたいのは、組織とは何か？である。《図書館組織》とは図書館と文化機関がネットワークに合意し、ある一定地域の中で直接の関係を結ぶということである。

図書館および文化機関は国、州、地方自治体といった行政団体に属しているはずである。またある場合には教会とか全く私的なものもあるかもしれない。組織が関わる管区も様々である。〈国家規模〉、〈州規模〉そして〈さらにその下位規模〉単位、つまり州よりも小規模管区に就いても言える。

下位規模単位のシステムとは〈都市地区〉を指す、

つまり一都市、或は〈都市間〉に存在するある一定数の機関が集合することである。都市間ネットワークには様々な市町村の図書館が参加している。しかしながらそこには図書館のない自治体も含まれることがある。小規模のため未だ図書館を建築する時期にないと考えている自治体も、その市民には等しく図書館サービスを提供しなければならない。現に図書館を備えた他の自治体システムは徐々にではあるが市民に巡回ネットワーク、例えば移動図書館車で本の貸出しができるようになってきた。

図書館が一つの組織に入会することは何よりも先ず他の図書館と共通の目的をもつことを認め、それを達成するために出来るかぎり短時間でより良い方法で協力することを意味している。既に述べた通りその組織とはネットワークである。このネットワークの編み目、つまり協定を結んだ図書館には一つの役割が任される。そのネットワークが求める機能と目的は法に定められている。それはネットワークの生命を左右するものであり、それぞれ図書館のネットワークのなかで検討され、一般的指針や州法に定めた計画を考慮に入れる。運営委員会はその地域に現存する政治的、文化的、および社会的力を代表するもので、ネットワーク活動を管理する。この組織は他の組織との連絡、および共通の活動を調整する図書館を中心としたネットワーク構築を想定している。参加している図書館はすべて同意した指針に従って行動する。大筋においては中心となる図書館がネットワーク全体が所蔵するすべての資料を受け入れ、目録作業の調整を行う。だから各参加図書館の役割は手はず通り「総合目録」の編集作業である。

ネットワーク全体が機能することによる利益はきわめて大きい。これによってすぐさま重要な資料を探して提供できる。ネットワークは節約することで受け入れにかかる経費をもっとうまく活用できる。同時に図書館はどんな本を購入するかを決め、近隣の図書館が無用な重複資料を置くこともなく、市民が良く利用する多様な資料を増やすことになる。

これまでに述べた通り、図書の目録作業の集中化、

つまり一カ所で一度に他の図書館が行う目録作業をすべて行うことに狙いがある。一つのネットワークの中の一館が入ってくる出版物全ての目録作業を行い、その本を受け入れた図書館だけでなく、他の図書館にもコピーを送る。それは個々の図書館が何度も作業を繰り返すことによる時間とコストを節約することとなる。その結果いずれの図書館でも、ネットワーク内の図書館は、所蔵する図書をすべて登録している総合目録を利用者誰でも自由に使えるわけである。要するにある資料を探す人はネットワーク内のどの図書館に行っても、探している資料、読みたい図書がどこにあるかを知ることが出来る。だから同じネットワークに属する図書館間の貸出サービスは極めて簡単で迅速となる。そして単一の図書館で提供するよりも、低いコストでより多数の文献が閲覧可能となろう。

さらにそのネットワークは利益のある文化活動を共同で計画し組織化することも可能とする。そうなれば隣り合った2つの自治体が同じような企画を同時的に行うという事態も避けることができる。

この図書館ネットワークがもたらす利点を読むと、それはすでに成功して現実のものとなったか、あるいはともかく普及段階にあると思わせる。その利点は必ずしもこれだけではなく、全ての図書館が一つのネットワークに参加するのを期待するほどのことはある。そしてそのように貢献することで、イタリア国内の図書館サービス効果のレベルアップをもたらしただのである。

ネットワークの効果についてまったく異存はない。それは我がイタリアでは確実に結果をもたらしたし、それを続けているからである。しかし他の国々ではそれ以上にもっと普及速度が早いのである。

我々イタリアでは未だ実験段階である。成功した例も確かな成果も例がない訳ではないが、その多くはまだ誕生後は発展性のない試みを行っている状況である。そこでこの不成功の原因は何か、このネットワーク形成で直面した問題点は何であるかをかいつまんで述べておく。

例えば、サービス地域の範囲をきっちりと限定ことが難題であるが、その問題はただ地理的に組み合わせることではない。例えば書誌サービスを別のものと見るのではなく、他の文化的サービスと一緒にしたいとなれば、参加範囲を明確にするのは難しい。場合によっては図書館と学校だけは同一学区の範囲に合わせるとか、あるいは地域の防疫上の単位で繋ごうという考えがある。しかしこれが必ず問題を解決できるとはいえない。

ここまで述べてきたネットワークは理想的なモデルにありがちな、あらゆる欠陥を備えている。つまりそれはあいまいで抽象的であり、行わなければならない状況把握が出来ていないことである。そのネットワークを現実機能させようと思えば、具体的な要件としてどれだけの経費がかかるのか、雇うべきスタッフ、既に所蔵している資料、そして何よりも実施範囲などを考えておかなければならない。そのネットワークは人口、社会および文化と言った状況に見合うものでなければならない。だから文化水準やその区域に住む住民が必要とするもの、つまり住民の数、平均年齢、職業、どんな学校に行ったかなどを考慮にいれなければならない。つまりそのネットワークは理想的なモデルに従うのではなく、状況に応じて何度も作り直さなければならないのである。

さらにネットワークにあるそれぞれの図書館が守らなければならないルールや役割を決める上でも多くの困難が生ずる。ただはつきり簡単に確認できるのは、ネットワークの中心となる図書館の役割である。残りの図書館はあいまいな定義に縛られる。その結果、加わった図書館は小さなルールに縛られていることに気付く。そしてそのときになって自治体の傲慢さ、利己主義に目覚める。そこで〈政治的〉に反対の立場となる姿勢を取る。実際は、それ以上にあらゆる要素が協力を阻んでいる。

ネットワークの失敗を決定づけているのは職員の準備不足によるものである。中でもいわゆるネットの中心となる図書館、そこがいわば基本的な役割を担っているはずであるのに準備ができていない。柔

軟性のない考えと知識不足がサービス内容を高めるせっかくの努力を無駄にしている。ネットワークの中心図書館の職員と実行委員会のやり方がまずければ、ネットワーク全体のサービスの質を落とすことになる。

国家的規模の目標を明確にしないと、図書館ネットワークがもたらす効果をさらにないがしろにすることになる。また理論的枠組みがないのでいつもイニシアティブを取るものがなく、図書館間の調整がつかなかったのである。時には、既に述べた通り、図書館にとっては主要であるはずの文字文化の伝達と伝播という目的が見過ごされてきたのである。展示会など、市民の教養的関心をかき立てる特効薬みたいなものだったのに、見せる魅力が失われてしまう。こうした場合、図書館ネットワークというよりも、一般的に文化的な内容について自治体間の提携を論じれば良い。

統一指針がないから図書館学固有の性格をさらに難しいものとした。目録作業のところで述べた通り、どこも全く同じであるのに規則が守られていない（唯一国立図書館にだけ共通の強制的な規定がある）。これが図書館間の正常な情報交換を困難にしている。現在ではこの多様性がコンピュータの使用形態にも表れている。最近になって書誌検索の速度アップとか、他の業務の機械化の部門でいくつかの実験が行われるようになった。しかしそれぞれ自分で行っているの、現在では図書館が別々に所蔵資料のデータを異なったコンピュータ言語で入力している。従ってコンピュータは様々な言語で話すこととなりその間で接続できない。図書館のコンピュータは同一言語でデータが入力されなければ、他の図書館のコンピュータに情報を転送することは出来ない。それについては後に述べよう。

第2節 国内図書館サービス

(Il servizio bibliotecario nazionale)

国内図書館サービスは何よりも先ず、イタリア国内すべての図書館を繋いで、従属している行政機関

がばらばらであることに決着を付けなければならない。異なった、つまり国家、州などの行政機関に所属していることは、図書館が行政によって別々の方針や財政を持っていることを意味する。州によっては図書館を「非常に重要な教育と情報の部局」と見て図書館サービス増強のため多額の予算を与えているところもある。他の州では様々で大抵の場合、極めて至当な理由として僅かな予算と言えども図書館に割り当てようとしない。従って州や国といえども、すべてが賛同して計画を実行するのは極めて難しい。これこそ〈国内図書館サービス (Sbn)〉計画を実現するにあたって一番の暗礁である。この計画は様々な関連機関の専門家からなる国家委員会が明らかにしてきたもので、その機関の中にフィレンツェとローマ国立中央図書館とローマの総合目録機関がある。

国内図書館サービスの主要な目的は、国内のあらゆる地域に関する文献を探し出して閲覧できるようにすることである。計画は一方でフィレンツェの国立中央図書館に中央古文書館を想定し、そこに出版法によって提供された出版物を登録する。他方ではコンピュータで繋がる全ての図書館との接続ネットワークを形成を考えている。ひとたびこの2つの状況（中央古文書館と接続ネットワーク）ができ上がると新しい目録方式が可能となる。それぞれの図書館は新しい出版物を受け入れ、目録を取る前に、それが他の図書館によって記述されているかどうかをコンピュータで確認する。登録がすんでいれば、その出版物を所蔵していることをコンピュータに入力するだけで良い。反対に登録されていなければ、その図書館が目録を取りコンピュータに登録手続きをする。このように導入することで次第に巨大な総合目録が形成されて行く。

個々の図書館が所蔵する資料にどんな文献があるかを自動的に判断し、貸出も複写も可能となれば、国内図書館サービスでは出版物の閲覧ができることとなる。利用者はコンピュータに質問すれば、関心のある資料を所蔵していない図書館からも、貸出と

言う方法で手に入れることが出来る。

司書はさらにコンピュータを利用して、利用者の貸出要求にも応ずる。資料が届いて登録されると、それを利用者へ手渡し、最後に返却されて終わる。全ての作業が自動的に自動的に実行されるので素早い効果的なサービスが保証される。

当然ながらこの計画に参加した図書館は共通の決まりに従うこととなる。目録作業とコンピュータにデータを入力する言語は同一でなければならないからである。

第3節 図書館業務の自動化

(L'automazione in biblioteca)

Sbn計画の実現を待つあいだも、イタリアではほとんどの図書館業務がマニュアルで行われている。しかし例外があつて、図書館によっては何らかの業務をコンピュータで実施している。

図書館のコンピュータ利用など、いわゆる一般に言われる自動化は様々な理由があつてイタリアの図書館ではあまり普及していない。コンピュータ・ブームは図書館員にとってあまりにも不意のことであつた。彼らには図書館の一連の業務にもたらす利益は分かっているものの、具体的な提案を勧めるに必要な準備が出来ていなかったのである。しかしことはこの数年の間に急速に変化している。図書館の文献整理担当者とプログラマ、つまり正に図書館の構築要求とコンピュータの必要性との仲介役を行う人々の関心の的は専門教育にある。その一方で地域行政当局、時には先ず州が自動化の道へ歩みたい人を信じていた。

しかし図書館の自動化が意味するものは何だろうか。ともあれまず言っておかなければならないのはコンピュータを利用すれば数々の困難を克服することである。事実コンピュータ導入には少なからぬコストが問題になるだけでなく、データ入力処理に関わるプログラム、つまりどれを共通言語とするかを解決しなければならない。

勿論人間のようなコンピュータを求めているので

はない。日常会話のような文章を記録に求めているのでも、主語、動詞、目的補語、最後の句読点で質問をするのでもない。《このアレッサンドロ・マンゾーニの本があるか?》をコンピュータに尋ねるだけである。また既に述べたとおり、著者目録カードでは話し言葉に近いがゆえに分かりやすい慣習語を使う。また異なった図書館のカード目録の間で、個々のカードの見出しに違いが生じる恐れがある。つまり図書館の間では異なった用語を使うことが極めて多い。その違いを克服しもっと込み入った状況を解決するのも人間の知恵である。しかしコンピュータには応用力のある知恵はないし、決断力も予測も出来ない。記述されたとおりのデータを登録し提供するだけである。

コンピュータの記憶装置には図書館が所蔵する蔵書の記述を登録出来る。こうして《データバンク》が形成される。出版物が表す全ての要素、つまりこれまでのカードに記載されているものをコンピュータに委ねるのである。だからそれを調べればどんな答えも提供できる。

例えば、個々の本の情報を持つことが可能である。あるいは書誌、つまりある著者とか主題の図書リストを手に入れることが出来る。しかし図書館の管理者としては購入、さらに未来のさらなる計画のため、あるいは今後の経費を知るためにもその総額に関心を持たざるを得ない。また登録と同時に、貸出業務を自動的に管理することが出来る。だからある出版物が貸出中の場合、誰がいつ返却しなければならぬのかが分かる。そのすべてがそれがただ単に押しボタンで全てが可能である。

求める回答が種々で数が多ければ多いほど、予備作業（プログラム）もますます複雑となる。実際、組織の自動化を設計する上で微妙なのがプログラムの決定である。プログラマーの業務がいても、コンピュータ技術には図書館技術が協力する事が不可欠である。司書はあらかじめ決めている目的と、プログラマーにそれをどのように加えるかを示さなければならない。

しかしイタリアの図書館では自動化したのは一部の例に過ぎない。例えばレッジョ・エミリアの《パニッツィ》図書館では貸出業務を全て自動化している。コンピュータには2つの異なったデータグループ、つまり2つのファイルが作成されている。ファイルの一つが利用者の登録情報を保有することにより、各利用者をその年齢、性別、職業によって戸籍や社会上の区分をする。別のデータファイルは図書のファイルであり、そこに基本データ、つまり従来通りの記載されたカードにある要約だが、正確に特定できるデータが記憶される。利用者が本を借りたい場合には、その本を開架書架から取り出し、貸出証と一緒に司書に見せる。司書は読者と図書をコンピュータで照らし合わせる。つまりその利用者がこれまでに借りた本が返却されているか、同時に貸出オーバーになっていないかを問うのである。またその図書の貸出が認められているかどうかを確認する。それがオーケーとなると、司書はコンピュータに貸出記録を入力する。これで完了である。もし不幸にも利用者が返却期日を守れなかった場合にも何も問題はない。コンピュータは予め起こりうる期限に備え、請求文を用意するよう、手配を整えている。司書に取ってはそれを無責任な人に送らなくて良い。利用者ファイルと図書館所蔵図書ファイルとを対照する事で、リクエストの多い出版物だけでなく、求める人をも特定することが出来る。事実、利用者は、年齢、性別、職業によってグループ分けが出来る。一方で本については、ファイルの中に分類記号と良く知られている主題がデータとして含まれる。だから受け入れ資料の中からより正確に選択し、確かな主題だけを取り出す事が可能となる。

《パニッツィ》図書館は貸出サービスが新たな管理上の問題をもたらしたために、コンピュータ利用による組織の変革を始めようとしている。同時に国内のどんな所からもくる情報要求と検索が叶うように、図書館の間のコミュニケーションを図ろうとしている。まだいつからか分からないが、やがて古いカード目録は姿を消すであろう。また全てこれまで

と異なった目録室となるであろう。それは《星座の戦争》のようにたくさんの小さなディスプレイで文字を示し、市民に迅速で効果的なサービスを提供する。また事務室では他の多くのディスプレイが日常業務をこなす。最早、ペンも消しゴムも、タイプライタも要らない。それでは被害があるとしたら？

第6章 結論 (Conclusion)

ここまでは今日イタリアの図書館はどのように機能しているか、近い将来に向かってどう機能するのかを、願いを込めながら考えを述べてきた。

最後の問題は記述情報を正しく慎重に受け取り、意思決定することであると思う。しかしさらに重要で未解決の難しい問題、つまり市民と図書館組織、あるいはその前に市民と本との関係を忘れてはならない。

ただ間違いないのは図書館サービス向上が不可欠であり、それによって初めて、図書館がより魅力的になりその結果利用者が増加するのである。しかしながら昔からの図書館に対する不信感を解消するにはそれだけでは不十分である。

実際、図書館はこのように拒否はするが歓迎しない、困っても教えない、妨げることはあっても慰めもしない、と言った具合である。外部の人には閉ざされた特権的な世界のように思える。職員は優れて教養を備えた人であり、少数の選ばれた人々と付き合っているように見える。実際にはそうではないが、これまで明らかにしようとしたとおり、図書館の業務は非常に易しい。職員も普通の人々と同じで、多少は有能で、優しくて、魅力的で遠慮は要らない。いずれにせよ、案じることはない、皆さんを決して試したり、成績を付けたりしない。

この点に戻ったのは市民と図書館の関係を变える事、図書館があらゆる人に開かれたサービスをする所とみてもらうこそ大事だからである。

図書館がインテリや学者に限られた階級の人専用の場というこれまでのイメージを、あらゆる人々に

貢献するものであるという風に覆さなければならない。実際こうしたイメージは図書館だけの責任ではない。どんな形の洗練された宣伝であれ、どんな市民に親しませる企画であれ、何としても受け付けない図書館がある。それは学校、行政、そして市民にも責任があると言わざるを得ない。

学校は児童生徒に図書館を使うよう教えてこなかった。書誌検索法も指導していない。しかもその図書館を減多に利用しないし、なおざりにしている。だからこどもたちは本や読書を楽しむことさえできていない。

行政は介入する必要を感じることもなく、ぐずぐずと長い間放置して来た。また我が国の教養や文化の発展という基本的な点を無視して来たのである。

結局、市民はつつい意慢にかまけて、社会施設に対し消極的な態度を装っている。自分の意見を聞かせようとしないし、権利の回復を求めない。自分の過失として感じている無知を認めるより、むしろ知る必要性を隠すほうを選んでいる。

さらに現代の人間と文字文化の関係については既に多くを述べたが、未だたくさん言うべき事が残っている。我々は間違いなく書写本と人間の繋がりが弱まった歴史的局面にいる。実際我々は全てイメージと音声で作られた文化に囲まれ、魅了されている。本は、今日は昨日以上に書斎と職場から手段として排除されている風である。しかしそれほどではないかもしれない。現実には読書は絶対に《無料の》くつろぎであり、落ち着いた娯楽の時間である。また図書館はこれ以上の安らぎの場はなく、他ならぬ本との出会いの場であるはずである。

訳者あとがき

本書を読み終えると、イタリアの図書館が目指す方向、特にこうした利用者のためのガイドの存在を重要事項と考えていることが分かった。図書館は誰のために、何のためにあるか、何故あるのか、それを利用者に知らせることの必要性を認識し、どのよ

うに知らせるかの努力を行っている。逆に日本では何故このような図書館ガイドが存在しないのか、必要としないのか、それを考えなければならないと思う。

とはいえやはり図書館のコンピュータ化では、イタリアも世界の図書館の状況を見無視できなかったこ

と、それと同方向を歩まなければならない苦悩が見えている。それでも、イタリアは独自性を持っている。古い資料をどこまでも大事にしようという姿勢である。もって銘すべしであろう。